

日本原子力学会・学生連絡会・シニアネットワーク共催
学生とシニアの対話 in 東京 2011 報告書

S NW対話幹事 松永 一郎 まとめ R-1 小川 博巳



開催日時： 2011年1月15日（土） 10:00～20:00（懇親会含む）
開催場所： 東京大学 浅野キャンパス 工学部 12号館&別館 会議室

報告書目次：	1. まえがき	8. 参加シニアの感想 抜粋
	2. 対話会スケジュール	9. 添付資料
	3. 参加者一覧	①対話会案内
	4. 開会の辞	②シニアの感想集（別添）
	5. Gr 対話の概要	③スナップ写真
	6. 講評	④電気新聞・報道記事
	7. 閉会の辞	⑤事後アンケートの結果
		⑥学生発表の PPT 集

1. まえがき

日本原子力学会・学生連絡会とシニアネットワークは共催で、「学生とシニアの対話 in 東京 2011」を開催した。本対話会に先立ち、学生が選択したテーマについて、学生とシニアがそれぞれ数名ずつ、ほぼ半年の期間を費やしてメールによる往復書簡の交換を重ね、単なる質疑応答にとどまらず真摯な意見交換を深めて来た。その延長線上で、更なる深堀を望む学生の要望に応じて対話会が開催された。併せて参加学生が全国7大学の学部生・院生であることなど、極めて稀有の対話会であった。この企画は昨年に続く二回目の試みであるが、学生・シニア双方にとって手応えの感じられる対話会であった。

2. 対話会スケジュール (詳細は添付資料①参照)

- 10:05～10:10 開会挨拶
10:10～10:20 シニア紹介
10:20～10:25 対話会の進め方
10:35～12:30 シニアと学生の対話 (前半)
 Gr.1 原子力の必要性班 (12号館 会議室)
 Gr.2 原子力の安全性班 (別館 3階会議室)
 Gr.3 核燃料サイクル班 (別館 1階会議室)
 Gr.4 放射性廃棄物処理班 (12号館 会議室)
 Gr.5 対外戦略・核不拡散班 (12号館 会議室)
12:30～13:30 昼休み (学生は論点を整理し、後半に繋げる)
13:30～15:30 シニアと学生の対話 (後半)
15:30～16:00 学生：議論の整理、簡単なプレゼン資料の作成
16:00～17:40 各グループによる簡単な成果の発表・質疑応答
17:40～17:50 シニア講評
17:50～18:00 閉会挨拶
18:00～20:00 懇親会

3. 参加者一覧 (参加者一覧は添付資料①参照)

- 参加大学： 東京大学・早稲田大学・東京工業大学・湘南工科大学
 東京都市大学・京都大学・大阪大学 計 22名
参加シニア： 日本原子力学会シニアネットワーク会員 計 21名
オブザーバ： 電気新聞・NHK 計 3名

4. 開会の辞 (概要) 齋藤 伸三 SNW 副会長

シニアネットワーク、SNWの副会長として、この挨拶を仰せつかったものと理解しております。はじめに、SNWの紹介をすべきかも知れませんが、大多数の皆さんは、既にご存知かと思しますので省略させていただきます。全くはじめてで、ご存じない方は、恐縮ですが、対話の中でも、あるいは休憩時間でも誰でも掴まえてお聞き願いたいと思います。

若い皆さんとの対話は、今日もお見えになっています竹内前SNW会長によりますと、シニアはシ・ニア、すなわち、死に近いグループが若い皆さんから活力と元気を貰う会合であると良く仰っていますが、誰も、本気で死に近いと思っていなく、喋り出すと止まらないところがミソであります。

さて、現在の原子力を取り巻く状況は、本日の対話の中でも議論されると思いますが、

明るい兆しと多事多難が織り交ぜられた状況かと思えます。

まず、明るい兆しとしては、54基の原子力発電所の平均設備利用率が、一時は60%を下回るまでに落ち込みましたが、柏崎・刈羽発電所も順次復帰し、無論、まだ満足出来る数値ではありませんが、最近では70%程度まで回復してきたこと、プルサーマル計画も玄海、伊方を先頭に軌道に乗ってきたこと、海外展開ではベトナムの原発計画にパートナーとして選ばれたこと等が挙げられます。

一方、多難としては、六ヶ所再処理工場のガラス固化施設のホット試験がなかなか順調に進まず、もんじゅも一度は動いたものも、また、燃料中継装置の落下事故を起こし、運転再開の見通しが必ずしも定まらない状況になり、加えて高レベル放射性廃棄物の処分場も一向に決まらないこと等があります。

このような状況のため、5年ごとの旧原子力長計の改定から脱却しようと名称を変えた原子力政策大綱も元の黙阿弥になってしまった感があります。ここは、多難として挙げた問題等を単に、ただ、延長、延期するのではなく、第2再処理工場計画とそのあり方も含めて、原点に立ち返って根本的な議論、審議を尽くし、皆が納得する案の提示が迫られているのではないかと個人的には愚考しています。

本日、ご参加の学生さんのほとんどは、原子力関連の仕事に就こうとお考えの方であろうと期待を込めて推測致しますが、これからの日本の、そして世界の原子力を担う皆さんにとっても極めて重要な課題として関心を持ち続け、機会があれば、皆さんの考えも積極的に発信して戴きたいと考えます。

本日は、皆さんとの対話がシニアネットワークにとって、今年、最初の対話となりますが、学生の皆さんの周到な事前準備が大変行き届いたものであり、また、シニア側もメールで応え、あるいは、別途、事前の議論を学生の皆さんと行ったグループもありますので、これまでにない深彫りした、熱気のこもった議論になるのではないかと期待をしています。

また、学生さんの数とシニアの人数が同数で、これは初めてで異例なことであります。シニアも、現役時代に電力、メーカーに所属していたか、中立的な研究機関等にいたかで必ずしも意見が一致したものではないかも知れません。その辺は、どしどし突っ込んで多様な意見の中から納得出来るものは何か見出して戴きたいと思えます。意見発表時間は、決して人数割りではありませんから、学生対シニアで学生さんの意見発表時間が5割は超すよう積極的に発言し、徹底した議論を行い実り多い一日となるよう期待しております。

最後に、この準備には、カムナパート君はじめ学生幹事の皆さんが八面六臂の活躍をしてくれましたことをシニアを代表してお礼を申し上げ、開会の挨拶とさせていただきます。どうも有難うございました。

5. Gr 対話の概要

G 1. 原子力の必要性

G 1. まとめ 松永一郎氏

「研究開発」と「原子力の必要性に反して今日の日本に欠けていること」に関して、午前と午後に分けて対話した。

1. 研究開発について

- ① 原子力の研究開発予算は他のエネルギーに比べて格段に大きいと聞いたが、実情はどうか。またその分配は妥当なのか
 - ・原子力の研究開発予算はエネルギー関連予算の70%と突出しているが、他のエネルギーに比べて時間がかかること、一企業でできるものでなく、国がしなければならない部分が多い。
 - ・太陽光、風力発電などは民間で競争させた方が効率が良い。電力買い上げ制度の補助金は一種の研究開発費と考えることもできる。
 - ・金額の問題よりも、研究成果の評価がきちんとできているか、それをどう判断するかが問題。研究のための研究を排除していかなければならない
- ② 原子力分野の研究において、大学側と企業側で閉鎖的になっているように思う。より大学と企業側で連携できるようにするにはどうすべきか。
 - ・必ずしも閉鎖的とはいえない。以前は矢内原原則といって、企業と大学研究は切り離されていたが今はそのようなことはない。
 - ・大学教授にも企業出身者がどんどん入ってきている。そのような先生方のなかには企業と連携して、研究を進めている人が多い。

2. 原子力の必要性に反して、今日の日本で欠けていること

- ①国民の無関心・過度のアレルギーの改善方法、エネルギー・原子力教育の不備と国民への理解活動の促進
 - ・日本では戦後長らくエネルギー・原子力教育がなされてこなかった。国民の多くにエネルギーの重要性や原子力の必要性についての認識が低いのはそのためである。
 - ・国もそのことに気づいて、新学習指導要領で放射線や原子力について触れることになったが、教えるべき先生自体の知識がないので、先生教育から始めなければならない。小学生のうちから始めるのが一番良いので、時間がかかるのはやむをえない。
- ②ジャーナリズムの体質、役割
 - ・国民はマスコミのニュースを通じて、原子力の知識を得ている。いままでは原子力に対してどちらかというと悪いほうの過剰な報道が多かった。
 - ・しかし、地球温暖化問題やオイルピーク、原子力ルネサンスなどを経て次第に変わりつつある。
- ③ 三すくみ、政治家の役割
 - ・日本の原子力開発は国策・民営でずっときた。研究開発関連は旧科学技術庁(現文科省)、

原子力発電関連は旧通産省(現経産省)と縦割り行政の流れできているので、産官学が三すくみ状態にあり、最近では地方自治体まで入って四すくみ状態になっている。

- ・政治家の役割はそれを解消すること。
- ・原子力は不人気で票につながらないので自民党政権時代には正面から取り上げてこなかった。民主党政権になってようやく正面からとりあげるようになった。
- ・このような状況を打破していくのは、これからの世界を生きていく若い人たちの役目である。

3. その他

シニアがなぜ原子力を仕事として選んだのか？各シニアがそれぞれ説明。意識的に選んだ者はなく、皆自然にその道に進んだこと、仕事をしているうちに原子力の重要性について目覚めていったことなどを説明。また、エネルギー・原子力を学ぶ学生は常に自分の立っている位置を、世界/日本のエネルギー・原子力の実情と照らし合わせて、確認しながら進めば迷うことがないことを説明。スペシャリストだけでない、またジェネラリストだけでない「スペシャルジェネラリスト(T型人間)」を目指すべきとの意見がシニアから出た。

G 2. 原子力の安全

G 2. まとめ 林 勉氏

討論概要・午前中：安全性の技術面 (G:学生、S:シニア)

G：大口径管のギロチン破断はありえない。これをやめれば大幅なコストダウン可能ではないか？

S：ギロチンはなくても大破断は有り得る。冷却材喪失事故は大、中、小破断を考慮する必要がある。大きなコストダウンには結びつかない。

G：事故は避けられない。どのような対策をしているか。

S：事故から学ぶことが重要。原因究明を徹底して行い、再発防止対策を行っている。従って現在の原子炉は以前のものと比較してどんどん進歩している。

G：事故にはどのようなものがあるか。

S：設備に起因する大きな事故はほとんどなくなった。これからは設備の安全から運転安全の時代になる。

G：運転安全とはどういうことか。

S：設備万能ではいけない。設備を運転するのは人間。マンマシンインターフェースも考慮した運転しやすい設備とし、ヒューマンエラーを最低限にする必要がある。運転員の教育、定期的訓練が必要である。

G：設備人間双方の安全確保が必要ということか。

S：その通り。人間の面では運転員の他に合理的規格・基準の整備をし、働くことに意欲がもてるようにすることも重要だ。

G：海水冷却の他にどのような方法があるか。

S：大きな川や湖を利用しているところもあるが一般的にはクーリングタワー冷却が行われている。ヨーロッパでは内陸部に立地することが多く、クーリングタワーが多く用いられている。

G：PSA は原子力に適用されているか。

S：PSA の専門家によれば、適用しやすいものとそうでないものがあり、対象を良く見極めないといけないとのことだ。原子力には現状まだ適用されていないが、将来的には適用されることになるかもしれない。

討論概要・午後：安全をどう伝えるか

G：一般の方たちに原子力の安全をわかり易く説明するのにどのように行っているか。

S：実例を紹介。

G：原子力全般を説明するのにどのように行っているか。

S：メリットだけではなく、一般の方たちが不安に思っている事項、(放射線、廃棄物処理、安全、核拡散等)について技術的に解決できることをきちんと伝える事が必要。

G：事故の発生確率の説明は難しいがどのように行っているか。

S：原子力以外の他の事象との比較で説明するしかない。

G：マスコミへの対応はどのように行うべきか。

S：国レベルの対応、電力会社の対応等総合的に行うべき。特に事故の相場観を合意しておくことが必要。シニアでは間違った報道への抗議やNHKの記者、プロデューサーとの対話等を行っている。フランスの例も紹介。

G：事故が発生した時の対応は。

S：発生した時だけではなく、平時から地域やマスコミ等に対する説明や信頼の構築が重要。発生した時は信頼できる技術者がきちんと前面に立って説明することが重要であろう。

G：原子力教育の改善は行われているか。

S：新学習指導要領が策定され、この中で原子力教育についても見直しが行われている。試行的にこれに基づく教育も一部で行われだした。しかし教える先生が不足しているという事実がある。この改善が必要。シニアでは教育系大学の学生たちとの対話も進めている。効果を上げるには、高校、大学受験問題に出題することが望ましい。

G3. 核燃料サイクル

G3. まとめ 若杉 和彦氏

(1) 核燃料サイクルの必要性・トリウムサイクルについて

質問：かつてどのようなシナリオが検討されてきたのか、我が国における検討の変遷？なぜ今の炉型、サイクルが国策となったのか、今後ずっとこのままいくのか？他のウラン形態からの供給可能性（減損ウランの濃縮や海中ウランの利用など）は？FBRは必要か。そもそも、ナトリウム冷却炉は商業運転しうるのか？使用済み MOX 燃料の再利用やフル MOX コアの意義は？いかにして既存のプルトニウムサイクルと並行してトリウムサイク

ルの開発も進めていけばよいか？

回答と対話：これら質問の背景には、現在の六ヶ所再処理施設の遅延やもんじゅのトラブル、また、当面ウラン資源が供給不足になる心配も少ないという状況から、今まで採られてきたサイクル路線はよかったのかとの危惧の影があるように感じた。

ー過去40～50年間蓄積されてきた軽水炉と再処理開発の実績があること、また5年前（平成17年10月）には原子力委員会が「原子力政策大綱」の中で使用済み燃料の再処理・保管・直接処分を組み合わせた4つのシナリオを検討し、再処理路線を確認した経緯がある。

ートリウムサイクルも技術的にはあり得るし、インド等で開発されている。資源がウランに比べて豊富であることも認めるが、反応度を補うためにフロントエンドにコストがかかること、硝酸に溶けにくいいため再処理技術の開発が必要である等、商業化までにはまだ研究開発の余地がある。

ーサイクルの路線を変更するには長期間の研究開発と多くの人材を必要とし、電気製品の型式を変えるような容易さはない。トリウムサイクルと従来の軽水炉路線の二つに貴重な人材を二分し、しかも民間の出費で長期間研究開発を進めることは現実的でないだろう。

ー海水中のウランは豊富であるので、ここからのウランを活用すればエネルギーセキュリティ上の問題がなくなり、再処理して取り出したPuをFBRで燃やす必要もなくなる、Na漏えい事故等の問題も解決出来ていいのではないかと、この学生の意見があった。これに対しては、海水中ウランを商業規模で活用するにはなお研究開発が必要であり、実現の可能性は未知数である。研究開発は必要だから積極的に行って欲しい。また、MAをFBRで燃やすことを含めて再処理・FBR路線は放射性廃棄物量の縮小に大きく役立つことも忘れてはならないと説明した。

（2）我が国における核燃料サイクル開発の現状と課題

質問：なぜ核燃料サイクル開発がスムーズに進まないのか（ブレークスルーは可能か）？過去・現状を踏まえ、より良い研究の仕方はないか？技術的に一番発展したのは何か？一番ネックとなっているのは何か？シニアにできること、若手にできることは何か？シニアにできること、若手にできることは何か？核燃料サイクルの社会受容性と認知度向上のためにシニアの方はどのような取り組みをされてきたか、ないしはどのような取り組みが必要か？

回答と対話：

ーシニアとしては、SNW活動の中で5年前から全国各地の大学で学生達とエネルギーや原子力について対話を進めたり、シンポジウムを開催して議論の輪を広げている。また、「エネルギー問題に発言する会」が中心となり、政府当局者に対して意見を具申してきた。特に将来の教育者を養成する教育系大学の学生達にこれらの話を解説し、実態を正しく理解してもらうことが大切と考えている。

ー学生達若い人、特にここに参加された学生は既に原子力やエネルギーについて正確な知

識を持っているから、さらに進んで自分自身の意見を、出身の中学や高校の後輩に積極的に発言することをシニアは望んでいる。

(3) 国際的視点

質問：今後の世界の核燃料サイクルの展望と日本の核燃料サイクルの強化すべき点は？

回答と対話：

ー日本は軽水炉技術を導入して以来、現在の新型軽水炉の建設運転に至るまで長年その技術を蓄積してきており、その高い技術を継承した人材もいる。しかし、さらに海外に飛躍し、世界的な原子力ネットワークの流れに寄与出来るためには、①規制や基準類を国際間で通用するように修正していく必要がある、②現在の日本社会での若者は一般に外に出たがらない。もっと積極的に海外に進出して貢献しようとする気概を持って欲しい、③海外から戻ってきた優秀な人材を適切に処遇する人事体制が必要である。最後の人事体制については我々を含めて改善すべきポイントだと理解している。

ーグループ3に参加した学生のうち2名は既にIAEAでの留学経験を持っており、上記②については全くの杞憂であったことをうれしく思った。

(4) 他のエネルギーとのコラボレーション

質問：核燃料サイクルと自然エネルギーといった再生可能エネルギーの効果的な活用方法の検討は？

回答と対話：

ー太陽光や風力等の新エネルギーは、一般の国民から評判がよく大変期待されている。しかし、その能力を正しく認識する必要がある。これらは時間的な変動が激しい上にエネルギー密度が少ないために、太陽光と風力を合わせても、その発電電力量は一次エネルギーの1%以下であり、とても原子力や石油からの発電電力量と比較するレベルではない。従ってコラボレーションの言葉は正確でない。ただし、新エネルギーの開発は今後も積極的に実行すべきと考えており、反対ではない。

G4. 廃棄物処理

G4. まとめ 石井 正則氏

処理・処分技術と処分場選定の二つの視点から対話（質疑応答と意見交換）を行った。

1. 処理・処分技術について

- * ガラス固化体の管理はいつ頃まで必要か
 - ・ 使用済燃料直接処分と違い、ガラス固化体はU、Puを取り出した後なので、核兵器使用のメリットは少ない。盗掘の経済合理性も少ない。(使用済燃料直接処分の場合はU、Puやヨウ素、ルテニウムも含まれる。)
 - ・ 資源（レアメタル等）が含まれている（将来利用を考える可能性不明）。
 - ・ 地層処分では1000年もたてば取り出しやすくなる。
- * FBRの再処理にはどう対応するのか

- ・ 超ウラン元素が含まれることや、燃焼度が変わるので組成も若干変わるが、ガラス側で薄めれば同じ程度となる。
- * ガラス固化技術は大丈夫か
 - ・ 現在のトラブルは解決可能。新しい技術を産業技術にするためにはステップが必要。
- * 放射能を市民にどう伝えるか
 - ・ チェルノブイリ事故でも、放射線の知識があったハンガリーでは墮胎がなかった。
 - ・ 中越沖地震時では伝え方に問題。一般市民は影響の程度を理解できず、マスコミ報道は不安を煽った。

2. HLW 処分地選定について

- * 処分地の条件
 - ・ 候補地としての除外要件があるが、候補地になりうる場所は多い。
 - ・ 最終的な確認のためには、100年程度の期間がある(処分場閉鎖までの期間も)。
- * 地域の意思決定
 - ・ 一定の時期までは意志表示を可能とする必要がある。
 - ・ 諸外国の事例では、その期間の終了後(決定後)は不可としている。
- * 情報をどう残し伝えるか
 - ・ 一定期間情報を伝えられるようにする必要がある。表音文字はダメ。磁気媒体等も不向き。セラミックスにレーザーで印字するなどの方法が考えられている。
- * 誰が責任を持ってきめるか
 - ・ 国、電気事業者、担当部門(当面は NUMO)の役割を明確にし、責任分門を明らかにする必要がある。

G 5. 対外戦略・核不拡散

G 5. まとめ 伊藤 睦氏

新興国へのNPP輸出にたいして、対外戦略と核不拡散の観点から質疑応答・意見交換をおこなった。

①. 自己紹介

- ・ 学生の自己紹介に引き続き、前回の章対話会に参加しなかった益田と前回自己紹介をしなかった伊藤が簡単に自己の経歴などを披露した。
- ・ その後、学生成川君の司会に依り次のテーマについて主にシニアが意見を述べ、それに対して学生が補足質問と意見を出して議論した。

②対話項目

対外戦略

—新興国へのNPP輸出—

I) 新興国へNPPを輸出することのメリット

- 2) 政府、事業者、メーカーの役割について
- 3) 輸出先の人材教育の在り方
- 4) 賠償責任

対外戦略&核不拡散

—新興国へのNPPの輸出—

- 1) 輸出先国との交渉の在り方

核不拡散

- 1) 査察人の人材不足問題
- 2) 海外への人材流出問題。

6. 講評（概要） 宅間 正夫 SNW 会長

本日の対話会は、学生達から質問を事前にシニアに送るなどきわめて手際よい事務局のマネジメントで、また時間も十分に取ったため、学生・シニア双方共満足できるレベルの高い対話会だった。班毎の成果発表から注目点をいくつか挙げてコメントすれば、

「核燃料サイクル班」：日本のサイクル政策が原子力導入当初から一貫して、ブレないことの重要性を改めて認識。ドイツはサイクルから撤退してから急速に原子力が弱体化した。また六ヶ所再処理施設の国際リサイクルセンター構想案などプラント国際展開を控えたわが国で重要なことが未だに公的に議論されず、法令を改める機会も逸しかねないのは問題。

「原子力の安全性班」：ヒューマンエラーは運転員のみならず「人間が作り出した技術」には常に技術の適用過程でヒューマンエラーが起ころうること。原子力プラントでは、計画段階から設計・製造・建設・運転・保守のすべての段階で考え落としやミスがあれば、それが運転段階で顕在化しうる。したがって原子力では上記それぞれの段階で、その段階に適した方法で品質管理・品質保証に万全を期することが重要。エネルギーの重要性の理解に実体験が有効だがうまい方法がないことについて、例えば原子力プラント見学は見学者に感動と共感を与える、この際に「もしこのプラントが短期・長期に止まったらどうなるか」の想像力を働かせてもらうのも一方法だろう。

「放射性廃棄物処理班」：高レベル放射性廃棄物の処分地選定について公募方式はよいとしても応募した後の手続きに、意見は聞くとなっているが住民参加による議論の道筋が見えないことに不安感があるのではないか。スウェーデン・フィンランド・英国は公募に際してあらかじめ開かれた住民参加の道が明らかにされているようだ。また国・電力・NUMO三者の責任主体の足並みがそろわず、NUMO 一者に預けられているように見える。国民に対して三者が共同主体として強い実行意思を示せば信頼感向上などに違った局面が生まれるかもしれない。

「原子力の必要性班」：原子力志向の学生ばかりなので必要性に疑問なく、問題はそれを国民・政治家・マスコミ等はどうアピールし、理解させ、行動に結び付けられるか、が焦点。シニアが学生から「原子力が必要不可欠と考える理由」を問われて、ほとんどが原子力に携わった動機に特別な思い入れは無く、入社後に原子力部門ができてそれに配属されたに過ぎない、しかし原子力に携わっているうちに原子力への信念が燃え上がっていった、ということで、対話では口角泡を飛ばす勢いで原子力を熱く語るシニアの姿が印象的だった。

「対外戦略・核不拡散班」：シニア国際問題の専門家を含めて高度な議論があった。インドへの原子力輸出に当たっては、例えば新宿中村屋のインドカレーをもたらした、戦前に日本に来たインド独立運動のボース氏を日本が支えたなど日本とインドの歴史的な関係も頭に置いておきたい。またベトナムは対米戦争のときに旧ソ連に相当の支援を受けたようで、第1期の原子力プラントがロシアにいったのも義理に厚いベトナム国民として無理ないことかも知れない。当初から「日本から原子力を」といていたベトナムが第2期に日本にパートナーシップを求めてきたのは、この意味からして日本を本気で頼っていると考えられ、日本はことさら真剣に取り組むべきと思われる。また注意すべきはベトナムなどへの日本からの「反原子力」輸出。相手国内への原子力理解活動への支援が重要になる。

最後に一言。米国アイゼンハワー大統領の国連での「平和のための原子力」提案から60年、一昨年のプラハでの同じく米国オバマ大統領の「核兵器のない世界を目指そう」演説と合わせてみれば、「原子力を賢く使うことによって核兵器を持つ必要の無い平和な世界を築いていこう」という、アイゼンハワーの理想の今日的な意義が見えてくる。これこそ原子力を「破壊の手段」から「平和を築く創造の手段」へ変えようとするものであり、「原子カルネサンス」の本当の意味はここにある、と思う。時間がかかるであろうが、これからの若い原子力技術者すべてがこの理想を共有していくことを期待したい。

今回の対話はシニアにとってもまた学生にとっても実り多きものだった。ありがとうございました。

7. 閉会の辞（概要） 小川 博巳 往復書簡・対話会調整役

朝から夕方まで長時間に亘り、大変ご苦勞様でした。それぞれのテーマ毎に、半年を費やして、真摯な往復書簡の交換を重ねて来ました。学生諸君は学業の傍らで真剣に取り組み、シニアの皆様は丁寧にそれに応えられて、敬意を表します。その延長線上で十分意を尽くした対話を終え、快い充足感と手応えを味わっていることと思います。

対話会の閉会にあたり、一・二お願いがあります；

テーマを絞っての往復書簡は、昨年からはじめた企画ですが、学生諸君もシニアの皆様も大変貴重な成果を積み上げました。このまま終えるのは誠に勿体ない。そこで、松永さんをお願いして学会に掛けあい、金額は十分ではないが予算が確保出来たので、成果を限定出版するつもりです。一般市民に向けた出版ではない限定版なので、安心してありのままを編集し、皆さんの人生のエポックとして残して頂きたい。テーマ毎の学生幹事はご苦勞様だが、往復書簡と今日の対話を整理し、出版原稿のまとめをお願いします。

昨年度の往復書簡は、極めて希有の企画であり優れた内容だとして、是非とも一般市民向けに出版したいとの企画が、電気新聞から提案されました。シニアの皆様のご尽力で、再編集・再執筆が進みつつあります。電気新聞から新保さんがオブザーバ参加頂いたのは、その様な含みがあります。今回の対話会では一次原稿を参考配信しましたが、学生諸君の意見を吸い上げて、推敲する予定です。学生諸君はカムパナート君からの指示に副って、コメント・ご意見をメモに纏めて下さい。シニアの皆様は推敲に向けて、更なるご尽力をよろしくをお願いします。

今年の往復書簡と今日の対話会では、学生統括のカムパナート君のガンバリが素晴らしいものでした。そしてまた、参加した学生諸君のガンバリにも、絶大なる拍手を送りたい。更にシニアの皆様の頑張りも素晴らしいものでした。学生諸君から感謝の思いを籠めて、拍手を送りましょう！ 皆さん、どうもご苦勞様でした。

8. 参加シニアの感想 抜粋 (添付資料 ③シニアの感想集 参照)

- 往復書簡と事前配布資料など、学生の事前勉強を伺わせる密度の濃い内容であった。
- 対話準備と十分な対話時間が確保され、「知的な会話」が持てて素晴らしかった。
- 対話会を成功させるには時間の問題が大きいと感ずる。
- カムパナート君らの献身的な努力、全体の運営、気配りが素晴らしかった。

- 殊に核不拡散と海外戦略については、小規模の対話会を持ったことが、広範な問題への理解を深めることに大いに役立った。
- 海外展開については、相手国の政策や資金力、関連ニーズを把握することは当然であるが、相手国の現代史、国際関係、価値観、社会システム等の理解も必要との認識が深まった。
- 東南アジア各国では、日本から輸出されている反対運動も対処すべきひとつだ。

- 次の世代に真摯な若者が育っているのは心強い。
- 学生はやがて取組むべき原子力実務を想定して、自分の課題として捉えていた。
- 原子力導入に関する課題にどの様に対応すべきかを真剣に考え、シニアにその悩みを

ブツケル若者の姿勢は、見事であった。

- 日本人学生諸君の、尚一層の奮起を期待します。

- 次世代を担う学生諸君は、自分の将来のみでなく、グローバルな原子力産業の在り方、わが国の将来を展望し、何をなすべきかに付き尚一層の議論を重ねて欲しい。
- 自らの力強い展望などを聞かせて貰えると、より良い対話となるのではなかろうか。
- シニア（小生を含む）の意見に全面的に同調する必要はなく、今後とも自分の頭で考え、判断できるように大いに勉強していかれるよう切に希望します。

- 事前準備など大変な面はあるが、往復書簡と対話をセットにしたこの方式を発展させたい。参加学生の募集の在り方、少人数準備対話など等、更なる工夫が求められよう。
- テーマにとらわれずシニアの今までの経験に根ざした話しを織り交ぜることもできた。
- 「今後もこのような話がどこかで聞けるとありがたいのだが」と言われるように、いろいろな形でコミュニケーションが継続できると良いとつくづく感じた。
- 今回の対話の成果が往復書簡 2010 に集約され、限定出版できれば素晴らしい。

以下添付資料参照